労力の先行投資によるサンクコスト効果

藤澤ゼミ 2020 年度卒業　Y.D

１．はじめに

回収不能な過去の投資が将来の意思決定に影響を及ぼす効果はサンクコスト効果と呼ばれる。Arkes & Blumer (1985) は、これを引き起こす先行投資に「金銭、労力、時間」の三つがあると定義している。しかし、未だ労力に関してはサンクコスト効果を引き起こす要因となることが確認されていない。

山岸俊男（1998）は、社会的不確実性のある場合、つまり相手に騙される可能性の高い状況では、認知資源の投資行動（注意深く振る舞うこと）が行われていると述べている。この認知資源の投資行動が、労力の先行投資に当たり、サンクコスト効果の要因となると考えた。

２．仮説と目的

本研究では、「労力の先行投資（認知資源の投資行動）がサンクコストとなって非合理的な取引関係を継続する」という仮説を立てる。

本研究の目的は、労力の先行投資によってサンクコスト効果が表れるか否かを確認することである。また、条件間における被験者の意思決定の変化を考察する。

３．内容と方法

本研究は以下の手順で行った。

①金沢大学の学生を対象にグーグルフォームを用いたアンケート調査を実施する。アンケートは、設問 1「社会的不確実性無し×労力無し」、設問 2「社会的不確実性有り×労力無し」、設問 3「社会的不確実性無し×労力有り」、設問 4「社会的不確実性有り×労力有り」の四問で構成される。簡単な計算問題を解かせることで労力の先行投資を体験させる。

②アンケート結果より、McNemar 検定を行う。

③②の結果より、考察を行う。

４．結果と考察

アンケート調査を実施し、75 サンプルの有効回答を得ることができた。設問 1、3 間での McNemar 検定の結果、p=0.063 であり、5%水準で有意ではなかった。同様に、設問 2、4 間での McNemar 検定の結果、p=0.000 であり、5%水準で有意であった。

表１：設問 1×設問 3 のクロス集計表

	設問1 社会的不確実性無し×労力の先行投資無し				
		非合理的	合理的	合計	
設問3 社会的不確実性無し × 労力の先行投資有り	非合理的 (残差)	24 (4.64)	9 (-4.64)	33	χ^2値 3.448
	合理的 (残差)	20 (-4.64)	22 (4.64)	42	p値 0.063
	合計	44	31	75	

表２：設問 2×設問 4 のクロス集計表

	設問2 社会的不確実性有り×労力の先行投資無し				
		非合理的	合理的	合計	
設問4 社会的不確実性有り × 労力の先行投資有り	非合理的 (残差)	50 -4.44	1 (-4.44)	51	χ^2値 12.5
	合理的 (残差)	17 (-4.44)	7 -4.44	24	p値 0.000
		67	8	75	

表１の結果より、それぞれのセルには関連が無いことが分かった。また、p=0.063 であり関連の傾向は見られるが、設問 1 の合理的と設問 3 の非合理的を掛け合わせたセル（A とする）の残差が負の値（-4.64）であることから、やはり労力の先行投資がサンクコストとして作用するという仮説は棄却されたと考えられる。しかし、設問 1 の非合理的と設問 3 の合理的を掛け合わせたセル（B とする）とAの度数を比較すると A＜B であることから、労力の先行投資によってむしろ合理的な判断を行った被験者が多いことが分かる。

表２の結果より、それぞれのセルには関連があることが分かった。またこちらも労力の先行投資によって合理的判断を行った被験者が多い。以上より、労力の先行投資は合理的な判断を促し、それは社会的不確実性が存在する状況で顕著に表れる、と考えることができる。

５．おわりに

McNemar 検定の結果より、本研究の仮説は棄却された。しかし、労力の先行投資によって合理的な判断を促すという先行研究では確認されなかった結果が見られた。

＜参考文献等＞

・山岸俊男（1998）『信頼の構造』東京大学出版
・井垣竹晴（2008）「労力を先行投資した場合のサンクコスト効果の検討」日本心理学会大会発表論文集 72 (0)